

神様の贈りもの

【聖書】 テサロニケの信徒への手紙— 2章 6～13節

また、あなたがたからもほかの人たちからも、人間の誉れを求めませんでした。わたしたちは、キリストの使徒として権威を主張することができたのです。しかし、あなたがたの間で幼子のようにになりました。ちょうど母親がその子供を大事に育てるように、わたしたちはあなたがたをいとおしく思っていたので、神の福音を伝えるばかりでなく、自分の命さえ喜んで与えたいと願ったほどです。あなたがたはわたしたちにとって愛する者となったからです。兄弟たち、わたしたちの労苦と骨折りを覚えているでしょう。わたしたちは、だれにも負担をかけまいとして、夜も昼も働きながら、神の福音をあなたがたに宣べ伝えたのでした。あなたがた信者に対して、わたしたちがどれほど敬虔に、正しく、非難されることのないようにふるまったか、あなたがたが証しし、神も証ししてください。あなたがたが知っているとおりに、わたしたちは、父親がその子供に対するように、あなたがた一人一人に呼びかけて、神の御心にそって歩むように励まし、慰め、強く勧めたのでした。御自身の国と栄光にあずかせようと、神はあなたがたを招いておられます。このようなわけで、わたしたちは絶えず神に感謝しています。なぜなら、わたしたちから神の言葉を聞いたとき、あなたがたは、それを人の言葉としてではなく、神の言葉として受け入れたからです。事実、それは神の言葉であり、また、信じているあなたがたの中に現に働いているものです。

【序】 新型コロナウイルスは悪魔的なものか？

新型コロナウイルスが世界中で感染していることを通して色々なこと考えさせられています。まだしばらくは感染拡大防止のために用心しなければいけないことは確かな事なのでしょうけれども、そのことを通して様々な問題が、今生きている私たちに突き付けられていると思います。もちろん**医療の問題**があります。また、それと今並行して語られているのが**経済の問題**です。更に、**文化や芸術、スポーツ**の今後の在り方という問題もあります。そして、**差別や偏見の問題**も表面化してきています。

このウイルスが悪魔的なものなのかどうか、私はそれは、短絡的に決めつけてはいけないのではないかと考えています。ウイルスと似ているとも言われる「菌」は必ずしも悪いものではありませんよね。食料を発酵させるのも菌の力です。そして私たちの体の中には沢山の菌があって、その菌も含めて「人間」です。でも「**ウイルス**」は体を殺すから「**悪魔的なもの**」なのでしょう？ 私は**ウイルス自体は「善」でも「悪」でもない**と思います。私たち信仰者が本当に恐るべきものは「**体を殺すもの**」ではありません。イエス様はある時おっしゃいましたよね。「**体は殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな**」と。「**むしろ魂も体も地獄で滅ぼすことのできる方を恐れなさい**」

(マタイ 10:28)。悪魔のたくらみというのは、私たちと神様との関係を切ろうとするものです。ウィルスにはそんな力はありません。但し、今の状況は人生に襲ってくる「試練」の一つでしょう。でもその試練の中にあっても、神様と結びつきながら、祈り、また用心し、他の方に配慮し、共に生きていくあり方を誠実に考えて生きていく。それは神様を信頼しているからこそ出来ることだと思います。逆にその試練に負けて、他者を退けたり、差別したり…となったとしたらそれこそ「恐るべき方を恐れていない」生き方になってしまっているのではないのでしょうか。

[1] 「神の言葉」として聞く

キリスト教信仰というのは、神様との生きた「関係」ですよね。そしてその関係は、「言葉」というものをとても大事にします。これは「言葉遣い」ということではありません。「言葉そのもの」です。ヘブライ人への手紙の冒頭はこのような言葉です。「神は、かつて預言者たちによって、多くのかたちで、また多くのしかたで先祖に語られたが、この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られました」(1:1~2)。—キリスト教が伝える神様とは、観念的な神様でも哲学上の神様でもなく、「言葉をもって語りかけられる神様」なのです。そして、この言葉は、現実的、具体的に私たちを生かすのです (マタイ 4:4)。

今日の聖書の箇所の中で特に印象深い節は 2 章 13 節だと思います。—「このようなわけで、わたしたちは絶えず神に感謝しています。なぜなら、わたしたちから神の言葉を聞いたとき、あなたがたは、それを人の言葉としてではなく、神の言葉として受け入れたからです」。—使徒パウロやテモテたちが、今のギリシアのテサロニケで宣教をした時、その信徒の群は、それを単なる人間の言葉としてではなく、神からの言葉として聞いたのです。ここには「教会」の本質があるのではないのでしょうか。

皆さんも色々な牧師たちの説教を聞いてこられたと思います。その時に皆さんは、その語り手が神様自身だなどと決して思わないでしょうけれども、その語り手を通して、今神様が、私や教会に何を語ろうとしておられるのか、ということを感じながら聞いてこられたことと思います。それが大事ですよね。信仰とは「聞く」ことです。聖書解説や知識を得るだけなら本やインターネットで十分かも知れません。でも、知識を持つことが信仰ではないですよね。ですから私は「聖書を勉強する」「聖書が分かる」という言葉があまり好きではありません。信仰のいのちとは、語られたみ言葉を自分への言葉として「思いめぐらす」ことです。

説教者パウロはこの 2 章の中で、自分を母親や父親に例えて語っている所があります。まず母親の例です。7 節からお読みします。—「わたしたちは、キリストの使徒として権威を主張することができたのです。しかし、あなたがたの間で幼子のようにになりました。ちょうど母親がその子供を大事に育てるように、わたしたちはあなたがたをいとおしく思って

いたので、神の福音を伝えるばかりでなく、自分の命さえ喜んで与えたいと願ったほどです。」彼は権威者のように語るのではなく、幼子のように言ったと言います。丁度母親が赤ちゃんに愛おしく接するように私も幼子のように、というのですね。ちょっと面白い表現だと思いますが、私はこういうことなのかなと思いました。

赤ちゃんと一緒にいる時間を想像してみてください。(最近私の娘に女の子が与えられ、その様子を時々見て思うのですが)これは、母親(或いは母親代わりが)が赤ちゃんに合わせなければいけないですよ。それはいわゆる大人基準の時間ではないのです。しかし赤ちゃんにとっては、自分を愛し守る者、栄養をくれる者がいつもそこに居てくれる、自分に合わせてくれるということで赤ちゃんは生きて行けるのです。パウロは「神の福音を伝えるばかりでなく、自分の命さえ喜んで与えたいと願ったほどです」と書いていますが、これは最高の人間の愛だと思います。私も神の愛を受けた人間なのだ、その愛を持って私はあなた方に語りたく。こういうパウロを通して語られたみ言葉は、深く心に届いたのだと思います。

また、パウロは父親の例も出してこう言います。11節からです。「あなたがたが知っているとおりに、わたしたちは、父親がその子供に対するように、あなたがた一人一人に呼びかけて、神の御心にそって歩むように励まし、慰め、強く勧めたのでした。」—ここでも命令や上から目線ではありませんね。“父親がその子供に対するように、あなたがた一人一人に呼びかけて”と。いいですね。丁寧にさとしながら、“神の御心にそって歩むように励まし、慰め、強く勧めたのでした”と。これも、子どもが今どういう所に置かれているかを感じられないと出来ないことだと思います。私自身は自分の子育ては全く至りませんでしたので、こう言い切れるパウロは凄いいと思います。

[2] 聖書は神様の愛の贈りもの

このような言葉で感じ取ることが出来るのは、パウロのテサロニケの人々への愛と、また彼の言葉を“神の言葉”として受け取って生きたテサロニケの教会の人々の、神の言葉への飢え渴きです。語る者と聞く者が共に謙虚に神様の言葉の前に身を低くしています。言ってみれば神様の言葉を「もったいない言葉」として聞いているのです。

私たちは「聖書」を人によっては何冊も持っているでしょう。けれどもこの当時、印刷された聖書はありませんでした。巻物のような写本ですね。つまり手書きです。パピルスのような植物や、羊の皮を使った羊皮紙に文字を刻みました。でも元はと言えば、口伝です。口述筆記をしたのです。旧約聖書の中には「この言葉を書き記せ」という所が沢山出てきます。それを必死で書き取った姿が目には浮かびます。なぜそこまでするのでしょうか。神様の言葉を、代々の人々に受け継がねばならないという真剣な思いからです。記憶だけでは残りませんから。イエス・キリストの言葉(福音書)もそうです。私たちは今は簡単に聖書を手にし、読めますが、これは長い歴史の中でも

まだ何百年かの間のことです。これは代々の信仰者たちの信仰と汗の結晶です。

そう、「聖書」とは人間に対する神様の愛のメッセージそのものですよね。「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ」(ヨハネ 15:16)。神様の愛が先行して、私たちを捕えて離さないのです。これは「取引」ではないのですね。私たちはどんなことも取引にしてしまいます。損するか得するかというまるで経済の物差しで人間関係も、神様との関係も考えてしまうことがあるのではないのでしょうか。しかし神様は、与えて、与えて、与えて下さるお方です。その最大の贈り物が主イエス・キリストです。十字架ですよ。何故でしょうか。そのようにしてまで人間を捨てず、私たち一人ひとりをどこまでも愛し、つながることを、神様は決断なさったからです。これは、私たちへの「贈与」です。贈りものです。「愛」という贈りもの。それは「理解」するものではなく、「受け取る」時に、贈り物が贈り物となるのです。

[結] だから恐れるな

12 節後半にこうあります。—「御自身の国と栄光にあずからせようと、神はあなたがたを招いておられます。」これがイエス・キリストにおいて聖書が告げてくれる神様のみ思いです。

私は今日の話の初めの方で「体は殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ魂も体も地獄で滅ぼすことのできる方を恐れなさい」との主の言葉を引用しました。これはちょっと怖い言葉ですね。でもこれはビクビクして生きよという言葉ではないと思うのです。私たちの人生を与えて下さった方は、必ず最後の時に、それは地上の命が終わった後かも知れないけれども、私たちの人生の最終的な責任を取って下さり、御国の栄光に与らせて下さるということだと私は信じます。なぜならばこの後で主はこう続けて語って下さっているからです。マタイによる福音書 10 章 29~31 節です。

「二羽の雀が一アサリオンで売られているのではないか。ただその一羽さえあなたがたの天の父のお許しがなければ地に落ちることはない。あなた方の髪の毛までも一本残らず数えられている。だから恐れるな。あなたがたは、たくさんの雀よりもはるかにまさっている」

お祈りを致します。

主イエス・キリストの父なる神様、聖書の言葉を何か古代の言葉としてではなく、今この時代の中で生きている私たち一人ひとりに語りかけて下さる「神の言葉」として聞き、受け止めることが出来ますことを感謝いたします。主よ、あなたは生きておられ、私たちの心に日ごとに親しく語りして下さい。それをただ幼な子のように、ただ喜んで受ける心をお与え下さい。この世界はあなたの〈贈りもの〉で満ちている美しい世界です。この美しい世界の中を感謝して、赦された者として、互いに喜びの中を生きることが出来ますよう、私たちに上より愛を増し加えて下さり、深い所で恐れずに、あなたの愛に生かされる幸いをこの週も与えて下さい。

主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。